

現代短歌大系 4

木俣 修
齋藤 史
吉野 秀雄

責任編集

大岡信・塚本邦雄・中井英夫

現代短歌大系 4

木俣 修
齋藤 史
吉野秀雄

二書房

現代短歌大系 第四卷

(全十二卷)

一九七三年二月二十八日 第一版第一刷発行

編者 大岡 信
塚本 邦雄

中井 英夫
◎一九七三年

発行者 田川 敬吾
株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九)三三三番
振替東京 八四一六〇番

印刷所 第一印刷株式会社
製本所 株式会社鈴木製本所

現代短歌大系

第4卷 目次

木俣 修

003

齋藤 史

109

吉野秀雄

211

解説 上田三四一

325

編集協力

齋藤 慎爾

篠 弘

正津 勉

富士田元彦

装幀
澁川 育由

木俣
修



木俣 修 略歴

明治39年7月、滋賀県に生れる。大正10年、滋賀師範学校に入学、作歌を始む。昭和6年、東京高等師範学校文科卒業。在学中、白秋を訪ね「香蘭」に加入。渡辺しま子と結婚。10年、白秋の「多磨」創刊に参画。16年、妻死去。17年、第一歌集『高志』刊。亡妻の追悼録『雪天の白鷺』刊。前谷しな子と結婚。18年、玉川学園教授兼図書館長。『白秋研究』刊。23年、久保田正文と「短歌主潮」創刊。『冬曆』刊。23年、昭和女子大教授。『流砂』刊。27年、義宮御用掛となる。28年、雑誌「形成」創刊。30年、『齒車』刊。34年、日本文芸家協会評議員。『天に群星』刊。35年、宮内庁御用掛となる。37年、日本近代文学館常任理事。39年『呼べば咎』刊。39年、文学博士の学位を受く。実践女子大文学部教授。歌集のほか研究書、辞典等著書多数。

木俣 修 目次

冬曆

(完本)

007

抄

053

落葉の章 齒車 天に群星 呼べば飴 去年今年

木俣
修論

瀨沼茂樹

160

抄出をおえて

『冬曆』四四三首に加えて、その後の五歌集一九四一首からの三五七首、木俣修の門に入って二十四年になるが、師匠の作品の選抄という作業は予想以上に難航した。

ようやく作業を終えてよみがえる一首、「とりどりに推理たのしむごとき貌一人の怪しき死をめぐりて」。昭和二十四年の作品である。そのころの事件が思い出される。師匠にとっても私自身にとっても、さまざまな死に遠く近く立ち会わされた二十数年間であった。

大西民子

冬
曆
(完本)

目次

冬 曆

寒 蟬	〇〇
野 分	〇〇
回 想	〇一
ゆく秋	〇二
ある浮彫	〇三
冬 花	〇四
街	〇五
冬 曆	〇六
けふのおもひ	〇八
世 代	〇九
人 間	一〇
本 郷	一一
寒時雨	一二
行 路	一三
師走の眼	一四
凍夜吟	一五

芥

冬日點描	〇五
かなしき人々	〇六
貌	〇六
市 井	〇七
村落抄	〇八
芥	〇九
寒き春	一〇
景物詩抄	一一
生	一二
いきほひ	一三
童女哀悼	一四
表 情	一五
花ひと日	一六
惜春吟	一七
花 束	一八

暗き季節	〇三七
青葉	〇三六
世閒譚	〇三六
夏菊	〇三九
夜景	〇四〇
時	〇四一
素描日々	〇四三
塵層	〇四三
海上	〇四三
おもひで	〇四四

箴言	〇四五
怒り	〇四六
冢	〇四六
機關區	〇四七
炎天	〇四八
二年は過ぎぬ	〇四九
斷章	〇五〇
卷後小記	〇五二

冬 曆

寒 蟬

夕雲にひびく寒蟬のひとつ聲おもひやうやく秋にし入らん
身がまへて蟋蟀をねらふ仔の猫よ秋草叢に日ざしあまねく

颱風眼マリアナにあるこの夜を肌寒きまで蟲が音ぞ訝ゆ

たのしけく玉蜀黍をもぐ吾子見ればなに嘆かんやこの朝光に

コスモスは瓦礫の間に花そよぎ炊ぐひとゐてバラックのうら

しづかなる秋日射せれば銹鐵の沈める溝もけさは明るし

かぐはしく麵麩の焼けゆく夕まぐれ無言歌のうたを妻口ずさむ

かの瀬々を鮎はひといきに落ちゆかん冷えつつくだるこの夜の雨に

野 分

倒れたる群の墓石も曼珠沙華もただにかがやき丘の夕光^{ゆふかげ}

曼珠沙華あわただしくもすたれゆきけふ荒涼と野分だつ小野

腹癒えし幼子が母にせまりつつなに欲るならん低きこゑして

そののちを知ることなきかの陸^くの奥處^{おくど}はすでに雨冷ゆらんか

うで卵賣る前を過ぎころさへ疲れはてつつ夕の埃路

いきどほるころもはらに歩み來て夜の街川の昏きとどろき

ひと向きに伏したる粟になほ吹きて音さわがしもひるの野分は

身にこもる激しきものの或る夜はかたちをかへていたくやさしも

回想

黒暗に手さぐるごとく生き來しを悔しみはてて今夜^{こよひ}ねむらん

あきらめの言葉むなく吐きすてていくたりかまたけふも墮ちゆく

座標なき點のごととみづからをさげすみにつつすべもなかりき

新しき型の飛行機の過ぎゆくを朝々に目守るひとりのおもひに

混迷のなかに佇ちつついくばくか偽惡者めきて行ひしのみ

思ひ出のジプシーのうた響りいでてうかびくる若かりし誰彼のかは

おろかしきまでに貧しきかほ寄せてはつかなる酒をかこむひととき

數しれぬ小型自動車たむろして傷痕もすでになき一區劃

北洋に果てしひとりと南海ゆかへらぬひとりとをともにしぬばな

激語しついでみくるものを前にしておどおどとありしわれもそのひとり

身につけし呪符も破らんいくとせの孤獨のおもひおひやらふべく

ゆく秋

幼子はややしむごとく顔よせてにほふ木通あけびを食はんともせず

あらあらしき疾風はやちのなかに夜明けつつなほ蟋蟀せみのこゑはきこゆる

「家なき子」の註もかなしき寫眞にして檻樓のごとくもいくたり眠る

なほ辛き明日をしぞ思へけさ讀みてロイター通信の傳ふる文字よ

戒壇に坐すごとくありてこの夜のおもひしづかに徹らんとする

いくたびか蜻蛉せんだを捕れとすがり來て幼子はけふもわれをさいなむ

神興もむわらべのこゑよ焼原にこころゆくまで揉むとすらしも

書物も鍋も置き散らばれる部屋住みにおもひ卑屈におちゆくなかれ

逃げのびて山窩のむれに居るらめと涙たたへていひしひとこと

山なかの部落のごともしづまりて夜よの灯ともる丘のバラック

ある浮彫

甲よろひゐるころもつひにかなしきか遠木枯を夜よにきくとき

背の骨のまがるまでの荷を負ひあゆみ祈りすらなし没日いりひのなかに

地平の果もわが佇つ丘もさばかりるもののごと鎮み冬の落日

無頼の街の冬ともしびよおもおもと駄馬の蹄の音ぞ過ぎゆく

骨だつは頬ほのみならず日のくらし夜のおもひの乾びゆくとき
 擦り放マつ燐寸チの火焰はむらは枯羊齒にうつらんとして寂しき音す
 芥なすものなにくれと集め來てけものめきゆく冬のいとなみ
 冬の日のかがやくときに石段いしきだのみ残る廢墟りの凛々とうつくし
 渡來せしギヤマンの皿祕めもちてなに嘆きけんいにしへびとは
 神々の沼ぬの水を汲レリむ浮彫リフがかぎりなくやさし寒き灯のもと
 のちの世のさばきを待てといふ言葉木枯のこゑのごともわびしも
 板敷に身をこすりつけざし來るものを虐ぐとその獄にして
 獄中記のなかに狂ほしく日のひかり戀ふところありてわがおもひ沁む
 いくたりの人は訪ひ來てかそかなるわれをこころむきのふもけふも

冬花

無垢の日の思ひぞかへれ冷えこごる柵のはなにほふこの道